形態コメントの有効活用～
細胞の特徴を理解してもらう表記とは

◎関　律子[1)]
久留米大学学長直属、久留米大学　医学部附属臨床検査専門学校[1)]

血算や血液像は、日常診療に欠かせない一般検査となっている。造血器腫瘍においては分子病態の解明が進み、これらの知見を取り入れたWHO分類改訂第４版2017が用いられ、記載されている主なものをあげても数十種類にもおよび診断に難渋する症例も多い。多くの施設では、検査をオーダーした臨床医には、数値データのみが返却される場合が殆どである。一方、フローサイトメトリー(FCM)、染色体検査は、感染症や免疫状態の把握のみならず、腫瘍細胞の系統や分化段階を推測することが可能な検査で造血器悪性腫瘍の診断や治療効果判定に欠かせない検査となっている。しかしながら、どこの施設でも実施可能な検査ではなく、外注検査に提出している施設も少なくない。血液疾患の多くは多くの指標を活用して総合的に診断することが求められています。その基本となる血液像検査において、芽球などの異常細胞の出現、形態学的異形成がみられた場合は、電話連絡や報告書へ記載など、様々な形で'コメント'を伝える事が診断に導く一歩である。臨床医に対する適切なコメントは、臨床医の判断に役立つだけでなく、患者さんの迅速な診断、さらには早期治療につながる。

本セミナーでは、症例を提示しながら、臨床医に伝わる適切なコメントについて考えていきたいと思います。臨床医が何を知っていて、何を知らないか、どのような情報を必要としているのかが分かれば、適切な情報を提供し、追加検査を進めていくことも可能である。血液検査の不可価値を向上すべく、細胞の鑑別や報告のポイントを通して、検査報告を受けてからどのような臨床的アプローチに発展されているのかを症例を交えながら解説したい。本ワークショップが参加者の日常診療の一助とさせていただければ嬉しく存じます。